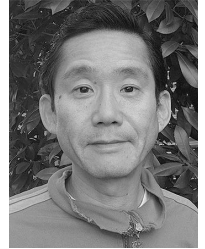


式部さんとともに

作家

いしいしんじ



どちらの帝さまの、頃やつたやろなあ。
女御やら、更衣やら……ぎょうさんいたは
るお妃はんのなかでも、そんな、とりたてて
たいしたご身分でもあらへんのに、えらい、
とくべつなご寵愛をうけはった、更衣はんが
いたはってねえ。

ある日、京都新聞社に呼ばれ、自宅から自転
車でかけた。黒革のかがやく応接間に通され
一年間、週に一度、古典文学作品の新訳をして
ほしい、と依頼をうけた。長くつづく名物連載
で、どの作品を訳するか、その選定はこちらに
任せるという。

これまでに訳された「枕草子」「方丈記」
等々のリストを眺めるうち、

「源氏、がありませんね」

「ああ、そうですね」

と担当の記者は苦笑し、

「一年で扱うには長すぎますから」

ちよつと考えさせてください、素晴らしい置い
て社屋を出、再び自転車にまたがった。

三十年近く乗っている、塗装があちこち剥が
れたロードバイク。社から自宅までは、京都御
苑南を東西にのびる丸太町通をまっすぐ走って
いけば、およそ三分でつく。

途中、寺町通の交差点でスピードをゆるめた。
この角を曲がり、少し走ったところに、紫式部
が源氏物語を執筆した廬山寺がある。

山門前で停まり、「紫式部邸宅址」と記され
た石碑をみあげた。自転車を押して歩きながら
新聞社からここまで、一度も地面に足がつかず
に着いたことに思いあたった。

靴をぬいであがり、白砂の「源氏庭」にむき
あつて座った。青空に、ゆつくりと動く白雲。
点在するみどりがそよ風に揺れる。彼女がこの
場所を筆をとった日々と、こうして過ごしてい
る今日この日と、いま、この空気は、なにが、
どんなにちがっているのだろう。

瞬間、ふわつと暖かな風が吹き、濡れ縁に座
すぼくの正面に吹きよせた。まるで目の前に立
つ誰かの息で、柔らくにくすぐられたような感覚
を絵身におぼえた。

「そうか」

立ちあがり、目の前に立つ目にみえない誰か
に一礼すると本堂を出た。自転車にまたがり、
また一歩も足をつかないまま家に戻ると、二階
の机にむかった。そうして「いずれの御時に
か」ではじまる冒頭部分を一気に訳し、京都新
聞の担当者に電話をかけた。

「できるところまでいいです」

ころなしか息を弾ませ、ぼくはいった。

『源氏物語』の新訳、やらせてください」

京都に住んでいると、「いま、ここ」が、よ
そよりよほど広く感じる。

先の戦争といえは応仁の乱、とは冗談のよう

にあげられるエピソードだが、じつさい通りを歩いていて、四、五百年程度前の名称や史跡に、郵便ポストか自動販売機なみの頻度で出くわす降りつもった時間の層の上に、パソコンや電気自動車をのせて、ぼくたちは住み暮らしている。地層をほんの少し掘りかえせば、ほんの足もとから、新興仏教の説法や、貴族たちの歌を詠む声が、透明な湯気か砂煙のようにたちのぼる。「いま、ここ」の源氏。どんな足どりで歩くのだろう。どんな風に笑い、どんな色の涙をこぼすだろう。

訳すにあたって、原文をくりかえし、くりかえし読み、書いた本人の声、息づかいに耳をすませた。そのうち自然と、胸のうちで「式部さん」と呼びかけるようになった。

「式部さん、光くんのこの所行で、さすがにま
ずいんちゃいますか」

「葵サン、黙ってますよけど、内心、煮えくりかえったはりますよね、式部さん」

意識していたのは「近さ」ということだった。

千年、とはただの数字だ。目の前にひろがる原文と同じ距離に、式部さんは、たっただいすわっている。ここ京都では、その距離感がリアルに感じられる。なにしろ廬山寺まで、ぼくのむかっている机から、自転車で三分とかからない。

そもそも源氏物語は、宮中という限定された場でまわし読まれ、その内奥で、女房たちに息がかかると距離で音読された。その息づかいを感じ

じながら、式部さんはいきいきと筆をすすめた。宮中の見知ったひとびとへ、じかに語りかけるように。「ものがたり」とは本来、そのようなライブな行為だ。

式部さんの姿は、あの暖かい風を浴びた瞬間から像を結んでいた。いま、京都で生きている、三十代の女性。艶やかなものが好き、仏教も好き。漢籍の知識、歌の才、ひとの世のさだめとはかなさを熟知し、それを笑いに変えるしたたかさも持ちあわせる。そんな彼女が、生の声でとどける「ものがたり」。

頭中将、待ちかねてみたいに大歓迎して、
いよいよ、雨夜の品定め、はじまりはじまり。
ヤバイ話でんご盛り、こころの準備、OK?

あのカワイイちゃん、いまは京のお邸におちつかはった、て、そない噂をきかはったんで、ちよつと経ってから、身があいた晩に、
光君、ふらつと訪ねていかはるん。

ますな、ずーんて胸長で、猫背っぽいんが残念すぎ。光君、ああ、やつぱしなあ、てシヨボーン。さらにさらに、もう、ヤバイくらい不細工なんが、ずばり。

鼻。
そう、鼻。

そこへ、わたし、出かけていく。あつちへこつちへ、ひきずりまわすん。気がちごたみに。滅茶苦茶に。ひたすら執念深く。とにかく、必死に、いじめ倒すん。そんな夢、何度も何度も見てる。見てまうん。

原文にないことは、訳語としては、いつさい書いていない。意識でなく、正確な逐語訳だ。息づかいを変えるだけで、こんないきいきと声がひびく。はじめから、そうきこえるよう、式部さんの手で書かれてある。

雅さがなく、とか、格調が消えた、とか、そんな声もどいた。そのことはわきまえていた。雅さ、格調といったようなものは、千年の昔を、都の宮廷を、平安貴族を、はるか上、遠い彼方へ、あがめ奉ったときにじんできてる、「距離」の感覚だろう。

ぼくは千年前を「いま」にふくめた。清涼殿や南殿に、ノートと鉛筆を握りしめ、息をひそめて踏みこんでいった。そこできこえてくる会話、ひそひそ声、笑い、嘆きに耳をすませ、きこえてくる通りに書きとめた。雅さや、格調といった雰囲気より、ぼくは、「いま、ここ」に生き、語りかけてくるライブ感をもとめた。

連載は一年をこし、二年の坂もこえた。近所の奥様がたから、「いしいさんの源氏、おもしろいわあ」と声がかかるようになった。

ときどき廬山寺に出かけ、濡れ縁に座って新

しい訳文を読みあげた。式部さんならきつと、笑つてきいてくれているだろう。ぼくのようなものが、いま、この世に生きて、彼女の書いた物語を訳している、そんな妙なさだめをおもしろがっているはずだ。源氏物語とは、そんな大きさをもちあわせた、世界唯一の作品だ。紫式部は、そのような作品をひとりで書ききった途方もない女性なのだ。

「葵」の帖まで、二年半つづいた新聞連載は、単行本「げんじものがたり」として出版された。古いようで新しい、新しいようでなつかしい、明るい夢のような装幀を身にまとっている。

読んで中高生から、しばしば「こんな話だったのか、とはじめてわかりました」「身近な話なんだと実感できました」などといわれる。そのたびにこう伝える。君たちが、平安時代に生きた作家の物語を読んで、そう感じられることがすごいんだ。書いたひと、読むひと、双方にとつての、奇跡のようなさいわいが、そこに生じているよ、と。

式部さんの声がきこえるようになって、自分の書く小説にも変化があった。

もともと、年代も地名もいっさい出てこない、夢に浮かんだほら話のような長編ばかり書いてきた。動物の声がきこえ、木の上のぶらんこから一日じゅうおりにこない少年と、その姉の話、とか。プラネタリウムに捨てられていたふたご

が、解説員に育てられ、ひとりはその跡継ぎに、もうひとりとは凄腕の作品師に成長する話、とか。「うなぎ女」に育てられた、水中で息のできる少年が、泥川の激流に乗って海へ流されていく話、とか。

たまに「ファンタジー」とジャンル分けされることもあるが、魔法使いも勇士もいっさいでてこない。時折、目にもみえない存在が登場し、語りかけてきたりはするが、それも、夜闇や夢のなかなど、ぼくの生きているこの世界で起きることと同じように捉えている。

わりと現世の話を、けれども銜いもなく、当たり前のこととして書く。へんなもの（雨のように空から降るねずみ、身の丈が大きくなったり小さくなったりする僧侶、などなど）が出てきたらそれもそのまま書く。そんな風な態度で二十年以上、小説をつづってきた。

それがある日、ノートの上に、時代はそうと特定はしていないものの、平安朝らしい話があるすると鉛筆の線で浮かびあがった。

女御や中将らが、いまだ御簾のかげで息をひそめ、みそひともじの連なりをおくりあつていたその頃、暇とお金がわりあい自由になる、そこそこの身分のおんなたちのあいだで、身のそばに小さないきものを置くことが、すすむにはやったことがあった。

うーん、これは、とぼくは、胸のうちでひとりごちた。ぼくのこのからだを使い、誰かが書かせているのだろうか。

それぐらいふしぎな感覚だった。自分の手だけで書いている、という実感がしない。誰かと声を合わせ、合唱のように語りかけている、とでもいったような。

書いているあいだぼくは、「みそひともじの連なりをおくりあつていたその頃」にはいりこみ、その時代を生きた。同時に、パソコンやノートのある現代にも生きていた。「げんじものがたり」のおかげだな、とぼくは思いあつた。式部さんの声、ことばに耳をすませるうちに、その「文体」が、ぼくの中からだにふんわりと、十二単のようにかぶさつたのだ。

十四の冬、大病にかかった。官女らが駿者を呼び、いどに数を尽くして御祈、経文を唱えさせても、いっこう患いのとれる気配はない。「いみじきこと。けもの、ものけが、においます」

平安朝の短い話は「たなうらひめ」というタイトルの東京新聞に掲載された。つづけて書いた「すつぽんと皇女」も、自然とその時代の物語になった。京都のすつぽん料理屋から「十周年の記念で、お店で小説の冊子を無料配布したので、すつぽんの小説を書いてほしい」とい

う依頼があった。

傍目には、十八、九の美丈夫と映るもの、すっぽんといういきものは、外面上、遅々と年を重ねる。じつさいの齢は、おおよそ百かあるいは二百をこえていたのではないか。なにしろ並の公家ではないし、並のすっぽんでもない。もともと、わんぱく坊主だった幼き日のみかどが、八瀬の溪流から連れ帰った幼なじみだ。

都の警護をつとめるすっぽんの○光まひく。そのからだにはこれまでに習得した無数の呪言がためこまれている。もののけや鬼に対峙したとき、○光の甲羅は青白く輝き、まるでコンピュータディスプレイに並ぶチャットGPTの文言のように、相手を祓う文言が浮かびあがる。

皇女、風子親王の息づかいからして、「すっぽんと皇女」の都は、「源氏物語」の時代より少しさかのぼる。祇園祭は「祇園会」と呼ばれ、山も鉾もまだ登場していない。「南無阿弥陀仏」の念仏も、この時代にはまだポピュラーになっていない。

いつの間にか雨はやんでいた。牛頭天王はうなずき、ホーウ、ホーウ、と笛のような声で叫ぶと、竜巻のような風となり、背後に置かれた「大將軍」の神輿にくるくると収まっ

た。

京都に住んで、物語をつづる暮らしをしていると、書いているもののなかに、むかしのひとたちの声がいりこまずにいない。ぼくたちはことばを、そのように受けとり、その先へさし渡していく。ただそれは、日本に住み、日本語を使っている誰にとっても同じではないか。さらに広げて考えれば、この星の上で、ことばをやりとりして生きているなら誰もが、たがいの声を、国境や時代をこえて引きうけ、次の誰かにていねいに引き渡していくものではないのだろうか。

声ばかりでなく、家のなかに、ときどき式部さん本人の気配がたつ。

昨年の秋、「げんじものがたり」が文庫化されることになり、講談社から送ってきたゲラを讀みなおしつつ、新版が出た「紫式部日記」(講談社学術文庫)をめくった。これまでに語られてきた、「日記」の成立した経緯をまっさら書き直す、大胆な解釈がすばらしくおもしろい。

「日記」を読み終わった日、新潮社から書評の依頼があった。小包をひらきゲラのタイトルを見て目をまるくした。古川日出男著「紫式部本人による現代語訳『紫式部日記』」。作家の古川日出男が式部さんの声を借り、みずからの日

記を現代語訳していく、という体裁の中編小説。机の上を見わたすと、オリジナルの「源氏物語」、いしいしんじ訳の「げんじものがたり」単行本とゲラ、新版「紫式部日記」、さらに「紫式部本人による現代語訳『紫式部日記』」のゲラがならんでいる。どうみても、式部さんが手をまわしたとしか思えない。人類史上、物事を縁づけからみあわせることに関し、彼女ほどの手練れはほかにいない。

以上のようなことを、京都新聞のウェブサイトに連載しているエッセイに書いた。赤ペンで原稿を修正し、社へ送ろうとした瞬間、ピンポイント、と玄関でベルが鳴った。

「いしいさん、封筒、ここに置いときます」と声だけが響き、からからと引き戸がしまった。河出書房から届いた宅配便だった。あけてみると、文庫版の、角田光代訳「源氏物語」1と2の二冊が、照れくさそうに出てきた。式部さん本人が、じきじきに届けてくれたのかも知れないと、いまでも思っている。